

北京中医薬大学での舌診講義について

20期中医薬膳師土日コース 山岡 真理

6月17日(火)、2014年北京薬膳研修旅行における重要なイベントの一つである、梁嶸(りょう けつ)教授による舌診講義が行なわれました。

北京で常態となっている渋滞を避け、大学には8時過ぎに到着。構内の全体を把握することはできませんでしたが、中・低層の教室や寮と思われる建物が立ち並び、並木道がその間を縫っている、都心の大学らしい雰囲気でした。丁度、学期と学期の間の時期のようで、学生達はあまり見かけませんでしたが、それでも、学生達が連れ立って歩いていた、卒業生と思われる角帽とガウン姿の学生もみられ、若々しい雰囲気がありました。



講義は、北京中医薬大学博物館のある建物の講義室で、研修旅行参加者のみに約3時間行なわれたもので、大変貴重な時間となりました。

梁嶸教授は、すらりとした長身でショートカット、知的さと自信が溢れた方でした。

また、教授の講義を日本語訳していただいたのは、現在北京中医薬大学に学生として在席している吉川淳子さんという方。プロジェクターを使用し、教授が一区切り説明された後、吉川さんが的確に訳され、またわかりにくい箇所には説明も追加していただいたことで、外国語の講義でありながら、違和感なくすんなりと頭に入れることができました。



講義内容は、前半は主に舌診の歴史について、後半は舌診の実証説明をしていただきました。

舌診の歴史は比較的遅く、その為、いつ頃から舌診が確立されたかが明確なことが特徴となっています。現存する最初の舌診専門書は元代『救(こう)氏傷寒金鏡録』(1341年)とのこと。この本に記載されている舌図の特徴は、全体的に赤(紅)色が多く見られました。これらは救氏によって描かれたもので、舌色を観察し紅舌が中心となっていること、舌象は、色艶が鮮紅色で舌苔が剥脱、舌上に赤い星、裂紋、黒点、潰瘍が現れているものも多いのが特徴とのこと。この本において、傷寒病に現れる舌の変化が診断のための情報であることが明らかになったこと、つまり、舌色や舌苔の色が紅・黄・黒に変化すれば、体内に熱があることが明確になったとされています。

ところで、舌診以前には、脈診による診断がなされていました。脈診は、いつ頃から発展したかが不明な程、古くから既に地位を確立していたとのこと。教授よりは、なぜそれ程確立していた脈診がありながら、中国において舌診がこれ程発展し、今では舌診が確固とした地位を確立したと思いますか、との問いがありました。もちろん多くの理由があるものの、脈診と舌診の大きく明確な相違点は、わかりやすさとのことでした。

その一例として、李東垣先生の歴史的に有名な逸話があり、例えば「寒盛格陽」の症例の場合、非常に優れた名医でなければ的確な判断をすることが難しいとの紹介がありました。つまり、舌診と脈診の方法の相違点は、舌は比較的明確で一定な症状を現す一方、脈はその時の状態を正に表すものの変化が激しく、一定の症状でないことが多いこと、舌は、医師が直接診察することができる一方、脈は患者および医師が肌を通して判断しなければならないことがあります。さらに、脈の状態を的確に認識・判別することが難しいことも挙げられました。

かたや日本においては、歴史的背景等で異なった発展をし、脈診より腹診が広く一般的であることが特徴とのこと。日本についての詳細な説明は割愛されましたので、その良い点と問題点については不明ですが、腹診も、やや脈診と同じ問題点をはらむことも少し説明がありました。(4頁に続く)



2014年度 秋期学生募集中!

- ① 中医薬膳師・家庭薬膳(通学)コース
第22期 土日コース [第3土・日曜日] (2014年10月18日開講予定)
- ② 中医薬膳師(通信)コース
随時入学受け付けております。

未来の薬膳師を是非ご紹介ください!

※ ご紹介頂いた方が通学コースに入学されました場合、些少ながら謝礼いたします。

